

一 河出書房)は、小田切秀雄が「日本においての活字印刷の労苦の歴史を人間中心に淡々と描くというやり方で戦争と軍国主義へのじみな抵抗の心をしめていた」と評したごくの秀れた業績である。

ここでも、『時代の圧力に屈した』痕跡として、絶版声明と『先遣隊』とがあげられている。頻りに言及される絶版声明について、新聞記事「『太陽のない街』其他著作／絶版を宣言／徳永直氏が大転回」(『読売新聞』昭12・12・26夕)を次に引いておく。

日無一派の左翼陣営総検挙を機として左翼系代表的新劇団「新協」の自発的転向申出でなど時代の大きな転回が文化面に最も赤裸に現はれてゐる折からプロ文学一方の雄徳永直氏が左翼物華かなりし頃プロ小説の代表作として洛陽の紙価を高からしめた「太陽のない街」「失業都市東京」他数種の著作について各出版元に対し絶版を申し渡し更に「太陽のない街」は英、仏、独、露、支、エス等各語に翻訳され、その他の著書もいづれも二三ヶ国語に翻訳発行されてゐるのに対して、出版当時と今日の一般現実とは全く時代を異にしこれら著書の内容が今日の日本の一般現実である如く誤解されることを惧れて国際ペンクラブを通じて二十五日付で絶版の宣言を発表した(2面)

こうしてみれば、絶版声明から『先遣隊』へと至る徳永の軌跡は、『弱さの現われにはちがいない』と批判する岩淵剛も認めるよう

に、『後退やゆらぎ』と称すべきものであると同時に、『常に戦争とつながっている』——つまりは『厳しい時代』のゆえに、歴史的に余儀なくされたものでもあるのだ。

もとより、右のような徳永批判は今なお成り立つが、それが戦後、外在的に可能になってくることにも自覚的であるべきだ。逆にいえば、転向作家として、日中戦争開戦以後にも書いていく、同時代を生きる文学者の立場や環境も考慮すべきだろう。このケースは、徳永直および『先遣隊』に関わる固有の歴史的問題であると同時に、当の作家・作品が当時どのように受容されたかという、文学場における評価軸の問題としても重要である。というのも、ここには、転向作家が国策をモチーフとした小説を書くという、日中戦争開戦以後における芸術性と社会性との交錯が、満洲移民を主力派作家が書くという端的な私たちであらわれているのだから。こうした問題関心から、先行研究を瞥見しておく。

徳永直「先遣隊」は掲載誌の無署名「編輯後記」(『改造』昭14・2)において『大陸の先駆移民に思ひを馳らす徳永直氏の「先遣隊」(百枚)を以て創作欄のトップを切り』(112頁)と紹介されたように、満洲移民というモチーフが強調されていた。また、湯浅克衛「先駆移民」(『改造』昭13・12)、新田潤「満洲行」(『改造』昭13・11)などとあわせて、前後する時期に、満洲(移民)をモチーフとする小説が目立ちはじめた。

そうした中、徳永も改造社から派遣されて満洲視察(昭13・9・10)の旅に出る。この成果として、徳永はまず現地ルポルタージュを発表し、その後、小説として「先遣隊」を発表する。これらが一書にまとめられ、二一葉の現地写真がそえられた単行本が

『先遣隊』（改造社、昭14）である。以下、目次を掲げておく。

まへがき／黒い土と茶色の服／北滿の印象／北滿ところ／満洲芝居／新京所見／ハルビンの二泊／野良着その他／アジアの感情／先遣隊

徳永自身による「まへがき」によれば、『この書物は、昭和十三年九月から十月へかけて、満洲の主として北滿移民地を旅行してきた見聞記』、『最後に加へた小説「先遣隊」は、いはばこれらの見聞を基礎にして、私の想像や仮定にもとづいて成立つたもの』⁶だといふ。その上で徳永は、『満洲事情に明るい読者からみれば、或は私の一方的な見解になつてゐはしないかと、多分の不安もあります。私は私なりの、わづかながらの特徴もあらうかと、大胆にも付けにした次第です』（2頁）と付言している。

本稿で注目する小説の「先遣隊」は、文字通り満洲移民の先遣隊をモチーフとして、さまざまなトラブルにみまわれながらも、山梨県出身の主人公たち——「同じ山梨在から福松、民次郎、雄作の三人は手をつないでこゝまで来た」（6頁）——が、満洲での生活を築いていくまでの物語である。ここでいうトラブルとは、風土環境の違い、匪賊の襲来、「風土病で一ヶ月も寝込むと、弱つた神経に喰ひこむものは懐郷病であつた」（10頁）とされる屯墾病⁷、それから満洲に移民した男性陣にとつての結婚（相手）の問題である。開墾をはじめとした先遣隊員業務は、主には雄作を中心に描かれ、屯墾病にかかつて帰郷する民次郎は、主にトラブルとその解決を体現していく。というのも、民次郎が帰郷した故

郷では、じき満洲への分村移民が決まり、そのメンバーに民次郎の結婚相手も含まれていたことで、民次郎は再び満洲に渡ることになるのだ。ここに二つのトラブルは一挙に解決されることになり、五十数名の花嫁が佳木斯に到着するところで小説は終わる。

昭和一〇年代における満洲移民をモチーフとした小説群を検討する若松伸哉は、『移民団が（満洲）の地において「匪賊」や「屯墾病」などと戦いながら開拓していくストーリーは「先駆移民」とも共通している』と、湯浅克衛「先駆移民」（『改造』昭12・13）との共通点を指摘した上で、『満洲開拓団の男たちの（家族）の獲得回復というかたちで物語が結ばれる』⁸点に注目し、『日本の故郷への想いを断ちながら（満洲）の地で建設される「新しい故郷」の核として、このテクストは（家族）の存在を提示する』のだといふ。別言すれば、『故郷』概念の根幹に、現実的な要素として（家族）が必要となる事態は、つまりそもそもが（満洲）を（故郷）とすることが幻想であり、矛盾であることを証明するもの』⁸なのだ指摘し、国策文学たらんとした「先遣隊」が図らずも孕むこととなった矛盾／批評性を剔抉している。翻つてみれば、平野謙も『後方の土』の立野信之にしても、「先遣隊」の徳永直にしても、「先駆移民」の湯浅克衛にしても、大陸文学の大部分はすべて旧左翼作家の手になるものである』として、モチーフにくわえ、その書き手の出自に共通点を指摘していた。さらに平野は、『マルクス主義文学の包蔵する一種の非文学性と、当時の国策文学の露呈した非文学性』に、『一脈共通するもの』を見出しては、それらに対する否定的評価も示していた。⁹

やはり、「先遣隊」について《北滿移住地の日本人先遣隊における懐郷病とその解消がテーマ》だと捉える浦田義和は、その内容を検討した後に、「徳永は、「文学」をどこかに封印し、「現実主義」的対応として、批判精神に欠けたルポルタージュ文学をものした》、《いずれにしても、徳永のルポルタージュ観は、揺れながらも国策文学に近づいた》¹⁰と、旧来の評価パターンをなぞっていく。岩淵剛による次の指摘も、同様の評価といえよう。

開拓団の実態を暗示させる表現はそこかしこにみられるのだが、表現から実態を読み取るには、相当事情に通じていなければむずかしい。というより、当時の読者には、表面的な姿しか映らないのではないか。ここに、時流への《抵抗》を見ることはできないのだ。徳永がそういう状況に陥ったということ、戦時下の彼の動向をみるときに、前提としなければならぬ¹¹。

あるいは、最新の研究において安志那は、まず《満洲移民の国策文学の多くは、現地調査に基づく報告文学》だとみなされ、《国策文学を報告文学として位置づけることは、それが単なる素材の拡張、基礎的調査の報告に過ぎないという批判に結び付く危険を受け入れると同時に、大陸の現実を描いた文学として一定の価値を担保するという意味を持っていた》と、粗い編み目から当時の国策文学一般の評価・位置づけを示す。その上で、作品(名)を主語として、次のような「先遣隊」の《限界》を指摘する。

「先遣隊」は、屯墾病を題材として満洲移民政策の重要な問題であった移民者安定化の解決策を提示する作品であるといえる。この作品は、屯墾病の表象が持つ様々な問題性、すなわち日本民族の優秀性への懐疑、満洲への大量移民送出に対する民衆側の抵抗感と距離感を描写しながらも、その意味を捉えられなかったという限界を露呈するのである¹²。

このように評価されてきた徳永直「先遣隊」について、本稿では、同時代評を中心とした言説の分析を通じて、同時代受容の地平・モードを検討していきたい。それは、「先遣隊」一作の問題ではなく、同時代の文学場を照らすことにもつながるはずだ。

II

国策による満洲移民は、当時の文学者にとっては、転向文学、農民文学、報告文学といった、意味あい・角度を異にする複数の文学ジャンルから適したモチーフとして目されていた。中でも大陸開拓のための動機づけたらんとした開拓文学が最も直接的なものである。事典記述から、「開拓文学」の項を引いておく。

文芸用語。昭和一四・一月、「大陸開拓文芸懇話会」が結成された。動機は満洲に日本が二〇年計画五百万人の開拓民を送り、民族協和の理想国家を建設しようという国策に協力し、一方従来 of 狭少な島国的文学を揚棄したい気持を持った当時三〇代の作家を中心とした。荒木巍・伊藤整・福田清人・

田村泰次郎・田郷虎雄・湯浅克衛らに、行きづまった内地農村の解決を大陸に発見した農民文学者と和田伝・丸山義二、転向文学者の島木健作・徳永直も同調した。拓務省との連絡は拓相八田嘉明の甥近藤春雄が当たり、会長は岸田国土。会員はしばしば現地を視察し、一般に大陸開拓文学と呼ばれる作品を発表。和田伝「大日向村」丸山義二「庄内平野」福田清人「日輪兵舎」徳永直「先遣隊」島木健作「満洲紀行」等が出た。また現地からも青年義勇隊員菅野正男の「土と戦ふ」等が出た。開拓精神に創造精神と共通性を汲み新文学の創造を念じたが、戦後は当時の国策便乗との批判を受けた。

ならば、徳永直「先遣隊」に前後する時期、満洲移民の状況はどのようなものだったのだろうか。同時代の報告である、和田日出吉「満洲移民の現在と将来」〔改造〕昭13・11)を次に引く。

第一次から第七次の先遣隊入植を通算して今年四月三十日現在でその総数は一万一千百七十名に達してゐる。家族招致をなした集団は、第一、第二、第三次は勿論にして第四次(密山線、域子河、吟達河)第五次(同永安屯、朝湯屯、黒蒙、黒台信濃)の各部落である。この外に第六次の数ヶ部落に一部の家族招致が行はれてゐるがこれらは未だ集団営農の域を脱してはゐない。移民予定地はすべて先遣隊によつて一応の地ならしを終つて後本隊の入植と云ふことになるのだが、この本隊が入植するまでには集団家屋やその他日常生活に必要な一応の設備は先遣隊によつてほどこされてゐる。入植当

初は集団農法である共同耕作、共同収穫が行はれ、收穫物によつて得られた利益は主として病院、学校、種畜場と云つた共同施設費に当てられてゐるので、当初各個人の期待し得る収入は些少の日常費を除いては殆んどない訳である。共同村建設の試練は先づこゝに初まると云へる。(略)概して集団経済から部落経済に分化するのに二、三年経過し、更に部落耕作地が各戸に分割され、各戸が村の構成単位をなすまでに一、二年経過してゐるがこゝに至れば移民地の第一期建設は終つたと云ふべく、移民定着性もいよゝ強度のものとなる。(4～5頁)

先遣隊の説明も含めて、徳永直「先遣隊」に書きこまれた内容とも重なる右の報告は、当時の満洲の実情を語っている。こうした時期に、小林秀雄「満洲の印象」〔改造〕昭14・1、2)が発表され、満洲に関する報告文学などよりも高く評価された。

たとえば、小林は「満洲の印象」〔改造〕昭14・2)において、《満蒙開拓青少年義勇隊孫呉訓練所といふものを、満洲拓殖公社の山口君の案内》(278頁)で見学した際のことを書いている。《訓練所には山口君から手紙や電報で再三照会して、連絡を頼んで貰つてあつたが、駅を下りるとそんな様子はさつぱり見えない》、《後で成る程と思つたが、訓練所はそれどころの騒ぎではなかつた》のだという小林は、次のように書いていく。

トラックは無人の野を、十キロも快走したらうか、やがて訓練所の本部に着いた。夕暮は迫つてゐた。白い地平線から

吹いて来る寒風に曝されて、一と塊りの見事しい家屋が並んでゐるのを見た時、僕は、千四百人の少年が、こゝで冬を過ごすとはどういふ事であるかを理解した。それは本の統計にも説明にも書いてない事であつた。いや、恐らく幹部の人達も、此処へ来てはじめてそれを理解したであらう。所長は不在であつたが、僕の会つた幹部の指導者達に、満洲生活の経験者と呼んで差支へないと感じた人を見付け出す事は出来なかつた、この新しい仕事には、皆言はば素人であつた。(279頁)

もちろん、小林にしても満洲の実情を、すべてありのままに書けたわけではない。右の訓練所についても、《どうしてもやり遂げねばならぬと決心して事に当つてゐる人間が、仕事の困難を語り合ふ語調には、極めて複雑微妙なものがある。僕のペンは、恐らくそれを合せ描き得ない》(281頁)と書きつけて、敬意・節度によつて、その実情を「空白」としてテキストに埋めこむのだ。

同時代評において「満洲の印象」は好評だったが、それに比して、過酷な現実や負の歴史も書きこみながらも、ついに、満洲への移民を推奨するストーリーを書いた「先遣隊」は、否定的な事象を「空白」にしなかつたがゆえに、国策宣撫と化していく。

あるいは、「満洲の移住地に入つてゐると、自分の居るのが満洲国だといふ事をふと忘れてゐることがある。そこにある生活は、日本人が伝統から脱け出して作つた日本だけの生活だ」と「槍騎兵 満洲の印象」(『東京朝日新聞』昭14・6・21)を書きおこす伊藤整は、希望にみちた満洲の様子を次のよう書いている。

自分等の考でやつて見るといふ觀念がいたる所で移住民に生き甲斐を感じさせてゐる。日本人がこの数十年來夢想したり、実践しかけたり、論争したりした様々な夢が、ことごとく満洲の各地で、卵からかへつたばかりの雛鶏のやうな美しさで、見るものはらはらさせながら歩きまはつてゐる。(7面)

こうした満洲への注目は、《最近、内地の文学者のなかにも、満洲を志す者が多くなつた》と現状を紹介する無署名「新潮評論」(『新潮』昭14・4)でもとりあげられる。同文では、《それらの作家》が、《拓殖文学を目指して、内地の農民生活との関連の上に、満洲を採入れようとしたり、単に満洲だけを舞台として、拓殖移民の生活を描かうとしたりしてゐる》様子を紹介している。曰く、《満洲人の生活、満洲在住民の生活、あらゆる満洲の社会が、そのなかに包括される》とした上で、《筆者は、さういふ満洲文学の誕生を待望してゐる》(10頁)と現地文学に期待をよせて、さらに、《満洲が新しい文学の苗圃として、漸く文学者の間にクローズ・アツプされて来たことだけは見過せない》(11頁)と付言していた。文芸誌においても、伊藤整・村山知義・今日出海「朝鮮・満洲を巡りて」(『文学界』昭14・9)あたりを皮切りに満洲(文学)への興味関心が持続的に記事化されていくやうになり、単行本では島本健作「満洲紀行」(創元社、昭15)が話題になるなど、満洲は文学者にとつても重要性を増していく。

III

本節では、満州移民をめぐる前節の議論をふまえながらも、初出「先遣隊」〔改造〕昭14・2）同時代受容の地平・モードについて、同時代評の調査・分析を通じて検討していきたい。

日中戦争開戦から一年半というのがその時機だったのか、文学場では、以後昭和一〇年代に問題化されつづけていく、あるモチ、フが顕在化しつつあった。中村武羅夫「文芸時評（3）」際物文学の氾濫」（『東京日日新聞』昭14・1・31）を次に引く。

戦争文学が現はれるとか、現はれないとかいふことが、ひと頃問題になつてゐたが、一度、火野葦平氏の「麦と兵隊」が現はれるや忽ち戦争文学は、ジャーナリズムの上に氾濫した。

殊に昨年の夏、大量の文学者が中支戦線に送られて以来といふものは、従軍記や、創作や、文学者の書いた戦争に関する記事や、現地報告の類ひが、ますます盛んにジャーナリズムを賑はしてゐる。読者も、ちよつと食傷の形ではないかと思ふ。

二月号の雑誌にも、「戦争」や、「従軍」や「大陸」を取扱つたり、それに触れてゐる作品の数が、創作だけに限つて見ても、大分ある。尾崎士郎氏の「ある従軍部隊」（中央公論）、日比野士朗氏の「呉淞クリーク」（中央公論）、徳永直氏の「先遣隊」（改造）、それから、これは創作とは言へないけれ

ども創作に近い感銘のもので、火野葦平氏の「東莞行」（改造）、大江賢次氏の「乱雲」（文学界）、井上友一郎氏の「従軍日記」（文学者）など、すべて「戦争」や、「従軍」や「大陸」を、直接取扱つてゐる作品である。（5面）

こうして、いわゆる時局ものが次々続々と発表されるようになり、日中戦争開戦以後的と称すべき『戦争』や、「従軍」や「大陸」をモチーフとした作品群が目立ちはじめていた。

こうした事態について浅見淵は、「文芸時評（1）」騒々しさの反省」（『信濃毎日新聞』昭14・2・2）において、『国策』という評言を用いながら、次のように論評している。

この頃の文壇で目立つ現象は、言ふまでもなく第一に戦争小説の氾濫である。それから大陸小説だ。また生産小説だ。これは統後の農村や工場を取扱つたものである。

ところで、いづれも国策の線に沿つて描かれてゐることは同じである。謂ふところの政治主義に依つてゐる。

さらに、こうした現象の原因を、『知識階級大衆の最大の関心が事変や大陸なりに牽きつけられてゐる限り、むしろ益々榮えて行くに違ひないと想像される』と捉える浅見は、『それは必然で仕方のないことなのだ』と否定的に受けとめてゐる。というのも浅見は、『現在の政治主義の作品に在る騒々しさ、つまり、かつてのプロレタリア文学作品に在つたと同じ公式主義、主観の投影のないところから来てゐる実感味の空疎、それから浮薄さ』と行く

のではないか」という判断・見通しをもっていたからである。

現在この傾向の作品では反つて正確なルポルターージュの方に文学的魅力が感じられる。だが、例へば本当の大陸文学が生まれるにしても、作者が大陸に腰を据ゑ大陸の特異性に同化した暁に生れるのであつて、長い眼で見るしか仕方がないのだ。そして、さういふ本物の作品が生れたならば、今日横行してゐる贗物は忽ち霧散してしまふに違ひない(6面)

モチーフと作者(の主観)との乖離を難じる浅見は、そうではなく、作者がモチーフにじっくり向きあつた末に到達し得る《本物の作品》の誕生を望んでいる、ということになるはずだ。

「先遣隊」においてモチーフが注目されていたことは、同時代評の多くが「先駆移民」を引例していることにも明らかである。

《改造の先遣隊徳永直は湯淺氏以来の移民文学》だと紹介する「文芸時評」(『文学者』昭14・3)の田邊茂一は、《前線の困苦欠乏、施設事情等が具さに語られ、移民者の不安の心理が細かく書かれてゐる力作》だと「先遣隊」を評価しながらも、《なほ一歩、徳永氏のやうな作家にこそ、この現実を理想の抱合した、東亜の運命への烈々の火を吐いてと、云ふ期待をもつた》(159頁)と、より力強い国策的宣撫が望まれました。こうした方向性で「先遣隊」を高く評価したのは、「文芸時評」(4)政府各機関と文壇の連繫(『読売新聞』昭14・2・8夕)の武田麟太郎で、《徳永直氏の「先遣隊」を読んで、今年度の「国民文学賞」はこれに与へられるべしだとの意見を持つた》と絶賛するばかりでなく、《所

謂国民文学のうちには当然「先遣隊」なぞの大陸ものも含めるべしと、ここで敢て云ふまでもないかも知れぬ》(2面)と、国民文学から《大陸もの》がもれることのないよう付言までしている。高見順は「文芸時評」(4)筋と描写(『中外商業新報』昭14・2・3)で「先遣隊」にふれて、《満洲移民を取扱つたもの》とそのモチーフを確認した上で、《同じ満洲移民を取扱つた湯淺克衛氏の「先駆移民」がひどく手薄の粗製品でそれと比べられるせみもあつてか重厚な感じ》(5面)だと高く評価した。逆に、神田鶴平「創作時評」(『新潮』昭14・3)で「先遣隊」は、《力作にも拘らず、失敗》と評され、その根拠が次のように示された。

湯淺克衛の「先駆移民」とおなじやうな弱点を持つてゐる。満洲を書くとき、どうして小説的な嘘が浮きあがつて来るのか。ちよつとぐらゐるでは、作家は満洲の土から真実を掴みとることは出来ないからであるか。(113頁)

ここでも、モチーフと作者(の主観)との乖離が難じられていくといつてよく、つまりは「先駆移民」との比較の有無に関わらず、同時代受容のパターンは相似だということになる。もつとも、中村武羅夫「文芸時評」(5)徒らに長いもの(『東京日日新聞』昭14・2・2)のように、《「先遣隊」などでも、構成の上にも、表現の上にも、もつと工夫を要するのではないか》(5面)と、単純に小説としての巧拙を問題化する同時代評もあつた。

やはり《満洲事変は既に歴史中のものとなり、支那事変は第三年目となつて、大陸或は戦争に関する作品が多くなつた》と、モ

チーフに注目する「文芸時評(4)大陸物と事変物」(『東京朝日新聞』昭14・2・2)の豊島與志雄は、「先遣隊」について《滿洲移民を取扱つたもので、最も小説的な構成のもの》だと捉えた上で、《北滿の広漠たる沃土を開墾する移民村の情景、匪賊との戦闘、屯墾病と称せらるゝ郷愁にかゝつて帰国する青年、その青年の再度の奮起、多くの家族や花嫁の渡滿、其他一通り道具が備はつてゐる》とその内容を要約しながら、まずは一定の評価を示す。ただし、《余りに多くいろいろのものが飾り立てられた故か、または余りに小説的な構成がなされた故か、精神が不在になつてゐる憾みが深い》ともいう豊島は、次のようにつづける。

北滿移民達を愛しその生活に同感することと、移民村の情景を小説的に展示する事とは、おのづから別個のものであらう。小説的展示に於ては、多くのものが初めから定着されて、生次字□の気が乏しくなる。(7頁)

賛否両面において類似した「先遣隊」評価を示したのは、北岡史郎「文壇時評」(『若草』昭14・3)である。《二月号の創作では、まづ徳永直の「先遣隊」(改造)を期待をもつて読んだ》という北岡は、《滿蒙開拓の農業移民を描いたもので、徳永は北滿の奥地まで調査してきた、言はば土産のやうなもの》だと期待の根拠を示すのだが、《三ヶ月まへに徳永はそのルポルタージュを「大陸」に発表してゐるのを読んで、それは非常に面白かつたが、こんどの創作はあまり大きな期待をしない方がよかつたやうである》と、読後の否定的な感想に即して次の問いを示す。

これよりも、まへのルポルタージュの方が遙かに面白く、感銘深く、かつ、この創作に表現されてゐる以上に、農業移民の辛苦と希望との生活図が、現実の大大感をつたへてゐた。それが、なぜ創作となると、一つの主題と構成とに苦心して表現の形式を与へられながら感銘がうすくなるか？

こうしたジャンル(論)とも関わらせた問いに、《題材本位のものは、たとひ主題や構成に苦心をつくしても、その苦心に、作家の内面生活の思想をもつてする自己吐露といふ芸術家の本質を伴つてゐない》(60頁)ゆえだと考える北岡は、《文学の本質が自己の思想をもつて小宇宙を繰り出してゆくことにあるとする建前から言へば、題材本位の文学はルポルタージュと本質論上の区別はない》という論理を介して、《其処に、徳永直のやうな力量と良心のある作家でさへが、「先遣隊」のやうな題材をとらへて、これを創作にしようとして苦心をしながら、しかも創作としては中途半端な感銘のものにもしてしまふ一問題が存する》と、モチーフと作者(の主観)との乖離を難じていく。さらに、北岡は時評文自身が《徳永直の創作から素朴な題材本位の文学への批判になつていつた》ことを認め、「先遣隊」については《この種の創作としては良心的に苦心した痕の感じられる普通作》(61頁)だと付言し、創作の傾向にこそ注意を促していた。

さらにその変奏として、中本たか子「第一歩」と徳永直「先遣隊」とをあわせて論じた、立野信之「文芸時評(2)精神の衰弱」(『都新聞』昭14・2・3)がある。《この二つの作品は、時局を

反映した作品として、その真摯な努力といひ、相当な力作である点に於いて、今月号の諸雑誌に現はれた作品中での双壁》だと、まず立野は作家・作品双方に対して一定の評価を示す。その上で立野は、《徳永も中本も共に生産文学のグループに属してゐる作家》であることにふれながら、《作品にも、それらしい、同じやうな手堅い、リアリズムの手法を以て、時局的なそれ故に問題的な題材と四つに組んでゐる努力は、充分尊敬に値する》ことを認めたと上で、《だが、そのまともな努力が、まともであればあるほど、何処かに無理やりに自己の才能を、時局的なもの、国策的なものに押込まうとしてゐる空々しさが感じられるのは、あなたがち才能のせむばかりではあるまい》と判じて、やはりモチーフと作者（の主観）との乖離が、次のように難じられていく。

この二作家は、共に思想に躰いた作家であるだけ、それだけ時局的なものと取組むことの中に、自己の思想的な生き方を求めてゐるのであらうが、それならそれが一篇の作家的モチーフとなつて生かされるべきだが、『第一步』ではそれが観念的な焦り過ぎとなつて現はれ、『先遣隊』では、巧みな行為の中に見失はれてゐるのは、共に遺憾である。（一面）

いずれの同時代評でも、モチーフに取り組む積極性、その帰結としての作品の出来には一定の評価が示されながらも、モチーフと作者（の主観）との乖離、あるいは、国策たるモチーフのみが先行して、作家の主観が十分に及んでいないことが露呈された作品として「先遣隊」は批判されていた。一言でいえば、《まだ身

につかぬ題材を持て余した》（立野信之「文芸時評（3）作家と作風」、《都新聞》昭14・2・4、1面）ということになる。

こうした同時代受容の地平・モードの特徴的な一面は、亀井勝一郎「ハムレットと兵隊——文芸時評——」（『文学界』昭14・3）によく集約されている。《徳永直氏の「先遣隊」（改造）と中本たか子氏の「第一步」（文学界）を読みながら、氏らは果して転向作家かといふ逆説めいた疑問が再び念頭に浮んだ》（154頁）という問いを提示する亀井は、『先遣隊』は建設途上にある満洲移民の刻苦の姿を、「第一步」は銃後農村における下層婦人の活動を描いてゐる」と両作品のモチーフを確認し、『この素材に私は何らの異議をもたない』としながら《しかしこの素材を見据えた眼は、作家の眼ではなく政治的与論のそれであるといふ点に、私の不満がある》と論を進める。《この失敗は作家としての失敗といふよりは、もう少し根本的なところに原因がある》と判じる亀井は、『嘗て左翼だつた者が、日本への忠誠を誓ひ、国策の基本に沿ふことはたしかに「転向」であるが、『徳永氏も中本氏も、山田清三郎氏も、政治的転向を直ちに芸術的転向と早合点したところに根本的錯誤があつたのではなからうか』（155頁）と、転向（認識）に疑義を呈していく。《立場は日本主義で、表現方法は今までとほりといふわけにはいかぬ》と述べる亀井は、『何かの権威、何かの政治現象に支柱を求めずしては安心出来ぬといふ、さうした根性を叩き直すのが転向』で、『従つて芸術の上で云ふならば、転向などといふ現象は全くありえないことであるが、若しあるとすれば奇蹟』であり、『作家にとつての奇蹟とは、畢竟作品を通じての精神の冒険であり賭け以外にない』（155～156頁）とし

て、次のように持論を進める。

徳永氏の「先遣隊」も或る意味では賭といへるだらうが、是は絶対確実な賭で、一円出せば一円戻つてくる、下手をやつても九十七銭は戻つてきて結局損失は三銭だといふやうな至極安全な計算から割り出されたものではなからうか。現代は芸術に驚くよりも事実には驚き易い時代だ。ましてその事実が国政の名によつて支へられてあるとき、これを直ちに創造の動機たらしめることは作家の純粹とはいへない。私は偶々徳永中本両氏をのみ責める結果になつたが、実は銃後の所謂生産文学者に対して同様の感想をもつ者である。(156頁)

亀井評は、「先遣隊」評の中で最も厳しく、転向した作家主体と、国策である満洲移民というモチーフの關係を問うたものといつてよい。ただし、ここまで厳密に捉えずとも、無署名「改造」(『三田文学』昭14・3)に示された通り、『好むと好まざるとに拘はらず、もし「植民文学」などといふものが設定されるとすれば「先遣隊」は先づ真先に役人の眼を魅くに相違ない』。そう思つてみれば、そこから浮上するのは次のような問題である。

国策文学といふのもおかしい言葉で、結果と動機が混用されてゐるため、作家のヒンシユクを買ふらしいが、但しここで考へねばならぬことは、文学は結果として国策に副はなかつたところでいけないとは絶対に云ひ得ないやうに、また国策に寄与したため純粹性を保ち得ないといふ輕蔑も小兒病的

でおかしい／唯、厭なのは規定された□^マ国策のなかでかくあらねばならぬ倫理を演繹したイーヂイな文学が所謂、国策文学として通用してゐることだ。徳永直の「先遣隊」もその類を免れ得なかつたことは甚だ残念。(17頁)

こうした否定的な評価の一方で、かつての徳永直の相貌を彷彿とさせながら、「先遣隊」を積極的に評価したのは岡澤秀虎である。岡澤は「時評 総合の様式への動き」(『日本学藝新聞』昭14・3・5)で、『文芸の社会性乃至大衆性がこの十年來何度要望され、何度立消へに終つたやうに見えたことだらう！だがそれは決して消え去つたものではなかつた。それが歴史の必然の要求であつたことを、今こそ明確に、力強く日本の文芸が示し始めてゐる』と、プロレタリア文学に託されていた社会性の回帰を、この時期に顕在化したモチーフに見出し、次のように論じていく。

近代の集団主義が、末期個人主義の行きづまり(近代ニヒル)に代つて、個人と社会集団との全的調和を実現せんとする意欲であることは云ふまでもあるまい。従つて集団主義的素質に立つ文芸が、今や大なる大衆性(客觀的眞実)を生成しつゝあることは当然である。徳永直や伊藤永之介等の作品がそれである。伊藤氏の場合にはそれが愛情的集団主義の文芸である点を、徳永氏の場合はその私小説が社会小説と一致するものである点を、認識しなければならぬ。

殊に徳永氏の近作『先遣隊』は、新たな集団的、ロマンチズムとして把握されなければならない。(3頁)

こうした見方からすれば、先遣隊として活動する（個人ではなく）集団を描いた「先遣隊」は、（右派的な国策とは正反對の）社会性と大衆性をもった、大衆的な国民文学だということになる。「文芸時評——二月の小説——」（『早稲田文学』昭14・3）においても《労働階級出身の作家によつて第一に、立派な満洲移民の生活真実が描かれたといふ画期的意義を個人主義作家は銘記しなければならぬ》と「先遣隊」を特筆する岡澤は、《これは機械的につくられた所謂「国策小説」ではなく、立派な集団主義的文芸》だと位置づけている。さらに、モチーフを同じくする湯浅克衛「先駆移民」との比較に及び、《その点で「先駆移民」よりは遙かに深い本質的な根を持つてゐる》、《「先駆移民」の欠点が集団主義文芸の欠点ではなく、個人主義文芸の過渡形態が示す欠点であることを、理解することが必要》だと両者の評価を明示した上で、「先遣隊」について《新しい集団叙事詩であり、集団生活の、全体的真実が充分出てゐる》（67頁）と、絶賛している。

以上を総じて、徳永直「先遣隊」がその発表・受容をへて同時代の文学場にもたらした意義をまとめておく。第一に、「先遣隊」は、同時期に発表されたほかの小説群とあわせて、戦争や大陸という時局的要素の濃いモチーフをとりあげた作品として注目を集め、また、同作もそうした傾向の一翼を担った。第二に、満洲移民（国策）をモチーフとした小説として、「先駆移民」との比較を含め、その内容・技巧が批評された。第三として、プロレタリア文学、転向という徳永直の経歴が重視され、そのような文学者が満洲移民というモチーフを小説化することに関して、モチーフ

と作者（の主観）の距離という観点から、主には批判的な論及を重ねられていった。これらの評価・観点は、徳永直「先遣隊」に対するそれであると同時に、昭和一四年の文学場における同時代受容の地平・モードの規則を照らしだすものでもあった。

IV

本節では、前節までの検討をふまえ、モチーフとしての満洲（移民）に関する昭和一〇年代文学のゆくえについて展望しておく。昭和一〇年代後半にも、大陸開拓文芸懇話会を中心に大陸（満洲）をモチーフとした作品は書きつがれていく。それは、戦時下における社会的有用性を承認されにくい文学者にとつて、国策的なモチーフをとりあげた作品の執筆が、明示的な社会的意義をもつということが大きい。そればかりか、昭和戦前期の文学史からみれば、大陸文芸懇話会に関わった福田清人『大陸開拓と文学』（満洲移住協会、昭17）を対象に、次のような指摘も可能である。

福田清人の『大陸開拓と文学』は、明らかに「国策」としての「大陸開拓」に対する文学の側の阿世の文章である。しかし、そこに少しも文学的なテーマがなかったということはいえない。伝統、国民、大衆といったキーワードは、近代文学のあまりにも西欧直輸入的な、エリート主義的な、芸術至上主義的な面に対しての強力なアンチ・テーゼたりえていた。それがプロレタリア文学の流行と転向文学を経て、「大陸開拓文学」へとつながったことは、ある意味では必然的な道筋

だったといえる。¹⁶⁾

同時代において批判されたとしても、徳永直「先遣隊」にも托されていた右のような意義もまた、大陸開拓文学による、歴史的な文学活動（の一端）を担うものであったことは間違いない。

そうした中、大陸文化振興会の幹事をつとめていた近藤春雄は、『大陸日本の文化構想』（敝文館、昭18）をまとめ、その「後記」において次のように書き記していた。

昭和十二年の初夏、私は官命によつて欧米各国に赴き主に独逸に駐在して文化政策と文化事業を調査し併せて青年運動をも研究して帰つてきたのであるが、その出発に先立つて特に再度満洲国を視察してその躍進的建設の実相を見極めて行つたことが日本人としての自信と矜持とをどの位力強く植ゑつけてくれたことか、我が民族の指導的能力の優秀性については他のいかなる外国人も遠く及ぶところでないことを確信するに至つたのである。

しかし、これは主として政治建設、経済建設、産業建設について当時の現状を規準に考へたことであつて、文化建設については尚ほ未だしの感があつたことは争へない事実であつた。

このことから、私は大陸文化といふことをより真剣に實際的に考へるやうになり、同志と共に大陸開拓文芸懇話会を創設したりして、その実践運動の一翼に参するやうになつたのである。（290～291頁）

つまり、ここに明示されたように、満洲移民（国策）とは広義の文化工作に関わるもので、それをモチーフとした文学作品も、高い社会的意義を担う。それゆえ、いくら戦後に国策順応といった批判を浴びることになつたとしても、戦時下である昭和一〇年代という歴史の渦中であつて、それは（転向者も含めた）文学者にとつて重要なモチーフだつたのだ。その意味で徳永直とは、「先遣隊」を書いたという事実においてすら、時代に誠実に向きあつた文学者の他ではなく、同時代／戦後評価の差異も含めて、ここには昭和一〇年代中葉における文学場の一面が凝縮されている。

注

- (1) 徳永直「いま広場へ出てきた——自分に即した回顧——」『文学界』昭27・11、93頁。
- (2) 浦西和彦「徳永直」（日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典第二巻』講談社、昭52）、46頁。
- (3) 岩淵剛「絶版声明」までの徳永直」（『民主文学』平25・8）、149頁。
- (4) 拙論「研究対象／問題領域としての昭和一〇年代文学」（『阪大近代文学研究』平30・3）参照。
- (5) 拙論「昭和一〇年代を見通しながら日中戦争開戦後の文学場を考える」（『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』神奈川大学出版会、平30）参照。
- (6) 中村青史「先遣隊」をめぐる徳富蘇峰と徳永直」（西田勝編『近代日本と「満洲国」 不二出版、平26）には、『小説より紀行文に見るべきものがある』（378頁）という評価がある。

- (7) 金川英雄「満州開拓団の「屯墾病」について」〔『精神医学研究所業績集』平18・2〕では、『記録によると個人の内的世界が無気力になっていく「うつ型」と、集団で外部へ向かう「攻撃型」と2種類あり、当時は両者をひっくり返るめて屯墾病と呼ばれた』(37頁)とされている。
- (8) 若松伸哉「満洲」へ移される〈故郷〉——昭和十年代・大陸(開拓)文学と国内文壇にあらわれた〈故郷〉をめぐって——〔『国語と国文学』平19・4、45頁、51〜52頁。〕
- (9) 平野謙「昭和文学史」(筑摩書房、昭38)、229頁。
- (10) 浦田義和「徳永直と「満洲」——ルポルタージュの罫・文学大衆化論の罫——」〔『社会文学』平22・2〕、2頁、7頁。
- (11) 岩淵剛「戦時下の徳永直」〔『民主文学』平27・11〕、126頁。
- (12) 安志那「帝国の文学とイデオロギー——満洲移民の国策文学——」(世織書房、平28)、16頁、408〜409頁。
- (13) 福田清人「開拓文学——かいたくぶんがく——」(久松潜一ほか編『現代日本文学大事典 増訂縮刷版』明治書院、昭43)、229頁。あわせて、板垣信「大陸開拓文芸懇話会」〔『昭和文学研究』平4・9〕、奥出健「大陸開拓を見た文士たち——伊藤整を中心に」〔『湘南短期大学紀要』平7・3〕、倉西聡「満洲移民事業と伊藤整——マイノリティーとしての立場からの転換」〔『武庫川国文』平17・3〕、尾西康充「開拓地／植民地への旅——大陸開拓文芸懇話会第一次視察旅行団について」〔『人文論叢』(三重大学)平26・3〕ほか参照。
- (14) 満洲移民に関しては、満洲移民史研究会編『日本帝国主義下の満洲移民』(龍溪書舎、昭51)、山田昭次編『近代民衆の記録6 満洲移民』(新人物往来社、昭53)、蘭信三『満洲移民』の歴史社会学』(行路社、平6)、加藤聖文『満蒙開拓団——虚妄の「日満一体」』(岩波書店、平29)ほか参照。
- (15) 拙論「昭和一〇年前後の私小説言説——文学(者)の社会性」〔『昭和一〇年代の文学場を考える——新人・太宰治・戦争文学』立教大学出版会、平27〕参照。
- (16) 川村湊『異郷の昭和文学』(岩波書店、平2)、41頁。
(まづもと) かつや 神奈川大学外国語学部教授